

博士課程教育リーディングプログラム現地視察報告書(平成27年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

| | | | |
|---|-----------|-------------------|------|
| 機関名 | 東京工業大学 | 整理番号 | C03 |
| プログラム名称 | 情報生命博士教育院 | | |
| プログラム責任者 | 三原 久和 | プログラム コーディネーター | 秋山 泰 |
| <p>1. 進捗状況概要</p> <p>○全体の運営について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 周到な計画に沿って、各種活動が細部に至るまで順調に運営されている。 ・ Γ（ガンマ）型人材養成の狙いやグローバルリーダー像が明確に示され、それらがプログラムの内容に反映されており、学生の満足度も総じて高い。 ・ 東京工業大学で採択されている4つの博士課程教育リーディングプログラムの一つとして全学的な大学院改革に組み込まれ、その位置づけが明確となっている。 ・ 全体責任者、プログラム責任者、プログラムコーディネーターをはじめとする関係者間で緊密な連携が図られており、本プログラムの成功にかける熱意と努力は高く評価できる。 <p>○学位プログラムについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ グループ型問題解決演習は、異なる専門分野間の違いを知りコミュニケーション法を学ぶとともに、グループで協働する力を身につけるという目的に大きく貢献している。 ・ 国際夏の学校は、実用英語習得カリキュラムと相まって、学生主導による企画・運営を通じたリーダーシップ能力の向上、実践力養成、国際性の学習等の点で大きな効果を発揮している。 ・ スピーチコンテストは、英語によるコミュニケーション力を高めるとともに、大勢を前にプレゼンテーションする経験が有意義なものとなっている。 <p>○指導体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ メンターとの定期的な面談が、プログラムに対する不安解消、将来の進路展望等において有効に機能している。産業界出身の若手メンターは、企業や起業について身近に知るといって有意義である。 ・ レーダーチャートを用いた学生ごとの目標設定と到達度管理が、効果的に活用されている。 <p>○学生の獲得について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 応募学生数がやや減少傾向にあり懸念される。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学生はコミュニケーション能力がリーダーに求められる資質と理解しているが、これに加えてリーダーの「グローバル」性についてもさらに踏み込んで考えてほしい。 ・ プログラムの目的や活動に関する広報・情報発信に加えて、学生がΓ型人材、グローバルリーダーとして何を学んだかについてもより積極的にアピールしてほしい。 ・ 応募学生数が減少していることについて、根本的な原因は何かをより具体的に検討し、今後の活動に反映してほしい。 ・ 支援期間終了後の学生への支援体制が未だ明確にされておらず、学生が不安を感じる要因となっている。将来の姿が早期に具体的な形で提示されることが望ましい。 | | | |

- 支援期間終了後については、大学全体の改革とも併せて適正規模を検討し、本プログラムによる人材育成を継続していくことが望まれる。
- 情報系学生の進路も考え併せると、支援期間終了後は基本的に生命系のΓ型を中心に考えるのが良いのではないか。
- プログラムの狙いであるΓ型の能力開発・育成のエッセンスのようなものを、5年一貫の博士課程学生以外にも拡大することを考えてはどうか。東工大全体のレベルアップにつながるのではないか。
- Γ型人材育成は既存の学術体系を拡張するものであることから、これを今後継続していくためにも、本プログラム修了生が大学内外においてΓ型人材の育成の一翼を担う人材となることも期待したい。